

<翻訳>

## 翻訳：ハリエット・マーティノウの自伝（2）

船木恵子

### [要約]

本稿は1877年に出版された *Harriet Martineau's Autobiography* の翻訳の一部である。翻訳は2010年のケンブリッジ大学出版を使用した。カッコ内のページの記載はこれに準じている。本稿部分は原著作28頁から60頁までの翻訳である。この部分は繊細でたくいまれな記憶力によって記されたハリエット・マーティノウの子供時代の思い出が記述され、彼女の性格形成と宗教観、及び重要な人間関係を知ることができる。また後半の人生の様々な出来事とつながる記述もあり子供時代の思い出とはいえ貴重な記述が多くみられる。19世紀のイングランドは功利主義哲学、実証主義哲学、進化論やドイツ観念論哲学の流行、キリスト教諸派の勃興などがあり、思想的に複雑な時期である。ハリエット・マーティノウはまさにその時代を生きた思想家であり、『自伝』には当時の人々の生活や出来事、彼女の後半生では多くの思想家との交流が克明に記されている。

### セクションII (p.28)

私の子供時代の第2期となり、あの思い出に残るニューカッスルの旅について書き始める時がいよいよやってきた。それはまさに子ども時代の最初の長旅で、子どもとしての思考を拡大させたというだけでなく、私がいわゆる「責任ある存在」と呼ばれるものになったということで記憶に残るものだった。旅から家に戻ると私は自分自身の道徳的責任を持ち始めるようになった。私は以前から、最初に物心つく頃から、本当に惨めで、無益な後悔にさいなまれてきた。しかし、私は実際ニューカッスルからアン・ターナーを連れ戻った時からきわめて宗教的になった。私は7歳の時でアンは14歳だったと思う。彼女が私を友人にしてくれたことは、私にとって素晴らしいことだった。彼女はもっぱら宗教的な傾向があったため私は私の人生を決定する何らかの影響を彼女から受けて、容易にその傾向に向かったのだった。

当時、旅行は簡単なことではなかった。私の母と私たちの愛する素敵で優しい叔母のマーガレット、一番上の姉のエリザベス、15歳のレイチェルと私、そして4歳の小さなジェームズは南京木綿の洋服を着て、3、4日の旅のために、皆で旅行用の馬車に詰め込まれた。(p.29) 私は当時のおおよその出来事はどれもはっきりと覚えているが、一つだけ報告しておきたいのは、興味深いことに私たち子どもがいかに自分の価値に気づいていなかったかが示されたことだった。もし私が、誰か自分を気遣ってくれる人がいると想像していたら、不安な子供時代の罪の意識や悲しみのほとんどすべてから免れていただろうと今私は思う。そして最初にその応援の真実を私に伝えてくれたのはアン・ターナーだったことをよく覚えている。彼女は「お母さんがなぜ私たち子供のためにあん

なに熱心に裁縫をし、夜なべしてあなたのストッキングを繕うのはなぜかしら？もしお母さんがそれをしなかったらどうなるのかしら？と問いかけた。それで私はすぐに納得できた。だから私は夜私たち子供が寝ているとき、母がストッキングを絶えず繕うというような実際の証拠を信じるのがあまりに幸せでたまらなかった。さて、旅の二日目では私たちはパーレーハウスに立ち寄り3人の年長の兄弟はギャラリーを見るために中に入った。一下の子供たちは入れなかった所以我们3人の小さな子供は、芝生の上の干し草屋の中で遊ぶことになった。長い時間が経った後、突然、年長の兄弟たちは私たちのことを忘れて、私たちを置いてニューカッスルに行ったに違いないと思った。私は決して寂しい思いをしたり、思い出したりしないようにと万全な説得をされていた。私たちはひどく泣き出し、方言がわからないけれど気立てのいい日焼けした干し草屋さんの女性が私たちを大きな扉の所までに連れて行ってくれた。彼女とマーガレット叔母さんが私たちを長椅子に連れ戻したとき、彼女たちがなぜ笑ったのか不思議に思ったのを覚えている。

もちろん、こんなに長い間閉じこめられた小さな子供たちを楽しませるのは容易なことではなかった。少し静かに戯れていたのを覚えてるし、親愛なる叔母さんによるたくさんのお話も聞かせてくれたが、最高の仕掛けは、おじいさんの庭の真中に立っているものを推測することだった(p.30)。見たことも聞いたこともこともない知らないものだったので、推測に限りはなかった。フォース（祖父の家）の門に着くと、老人たちとその娘たちが出てきて、みんな涙ぐんで興奮していた。私は嫌な子だったので待ちきれずに大声で叫んだ。「庭にあるあれが見てみたい！」考えさせるヒントをくれた後で、何も叱りもせず一番下の叔母さんは私の手を取り、謎に立ち向かうように私を導いた。私はそれを見た時感動で何もすることができなかった。それは大きくて重い石の日時計だった。あの日時計は、私にとって本当に計り知れないような価値があったのでここでこのように詳しく話すことにしたのだ。私はつま先立ちで体を起こすことでやっと私の目は文字盤の皿と同じ高さになり、その表面を見ることができた。昼と夜、季節や天候の概念の輝かしい混乱の中で私の最初の明確な時間の概念を痛いほどに形成し日々観察し深く考えた。私はある種の迷信に満ちたような日時計が大好きだった。それから40年近く経って、私がアンブルサイドに自分の家を建てたとき、私の強い願いは、テラスの下の足場にこの日時計を設置したいということだった。でもそれはすでに鉄道が祖父の古い庭を突っ切ったときに一度取り除かれていて、石の塊は重すぎて、さらに崩れて多くの破片になっていた。そこで、親愛なる友人が私のために美しい新しい日時計を設置してくれた。そして今私は祖父が私にしてくれたように、未来の世代の子供たちにそれが大きな奉仕をしてくれることを願うばかりである。

今思えば、私は当時めったに質問をしなかった。私は何年もの間思い迷いと共にあったのは私が質問をすることがいつも思い浮かばなかったからなのだ(p.31)。例えば、スプリングガン<sup>1)</sup>については私にはその概念がまったくなかった。——それはエンドウ豆色のマスカット銃のことで、春にしか使われないものだった！。この愚かさは私が20歳になるまで無意識のままだったことだ

---

<sup>1)</sup> 狩りや窃盗を防ぐために罠に引っかかると発砲するワイヤー付きの銃。イギリスでは危険なため20世紀に使用を禁止されている。

た！それが！私がバーミンガムに滞在したころ、夕暮れの中、田舎道の散歩から帰る途中、滞在先の亭主がスプリングガンを恐れて小さな森を渡らないようにと警告してその針金を見つけて見せてくれた。今まで私の心に眠っていた昔の過ちの感覚が私を襲ったとき、私は本当にぞっとしたのだった。1809年に祖父の理髪師が私に押し付けてよこした神秘的な一片とそれは一緒だったからだ。ある朝、髭剃りのポットが温められている間、床屋は私を膝の上に乗せて、なぜその朝遅刻したのかを話すふりをした。流れ星という言葉聞いたことがあるかい？ はい、あるわ。 そうなんだ、夜に星が落ちて、それはフォースレーンの道に落ちて道は完全に塞がれ、星はだれかの果樹園のそばに落ちた。それはとても丸く、最も美しく澄んだ結晶だった。「それまだあったの？」ああ、そうだ—ほとんどはね—だが、水晶の一部は震え落ちていて、彼がその場所に着いたとき、人々はそれを運び去っていた。だから彼はサムシング・ストリートを回らなければならなかった。そして、それが彼を遅らせたのだと言った。「散歩に行く頃には、何か残ってるのかな？」彼はそこにあることを願うよといった。その日の朝、私は熱に浮かされた状態でレッスンを終え、ナースメイドと約束してその道に案内してもらった。そこは果樹園で、リンゴの木が壁一面に広がっていたが、水晶の尖った石は一つも残っていなかった。私はそれを不思議に思ったがその話を疑ったり、床屋以外の誰にも話したりしようとは思わなかった (p.32)。翌朝、私は彼を待ち伏せした。そして、とても残念に思っていると打ち明けた。—たくさんあったのに、私のためにクリスタルを拾ってくれなかったのは残念だけど、いつか自分で落ちた星をみつけるに違いないわと。10月に別れを告げるまで、私は水晶さがしを続けたわけだが、私の初期の天文学の概念は、その男の大風呂敷に残酷にも混乱させられたのだった。あえて言うなら、その混乱を完全に抹消するのに何年かかったかということである。

家を留守にした残りの期間についての楽しいことについて言うことはほとんどなかった。祖父の家にはいたずらな少年がいて、そのせいで私たちは緑色の果物を盗んだという非難を受け、グーズベリーに触れるなど夢にも思わなかった庭から閉め出されたのだ。そのうえ彼は幼いジェームズをいたずらに導いて騒ぎ立て自分の立場を良いものにした。彼が引き起こした傷で、私たちの心ははちきれそうになった。その後、私たちは不当な食事を与えられ、私の悪夢のような悲惨さは耐え難いものだった。そのころの一番の出来事は、私の神学的な生活が形になり始めたことだった。私は聖職者に対して途方もない畏敬の念を抱き、彼らから注目を浴びることへの強い憧れを抱いていた。これには多くの虚栄心があったことは間違いないが、それはまた、宗教的感情の1つの投資でもあった。それは私が現在の感情、つまりあらゆる信条における司祭の知的、道徳的判断は他のどの階級の人よりも劣っていると根本的に確信していることの残滓を時々当時意識していたことである。私のこうしたことを直接的に気づいた最初の人は、私の知る限り、ニューカッスルの良き人ターナー氏で、私の母の牧師であり、彼は母の結婚前からの友人だった。(p.33) ニューカッスルでは、日曜の夜に彼の家でお茶を飲むのが常だった。そしてその時私たちは、その日の説教の1つの回想を書くという素晴らしい練習を始めた。牧師は子供が理解できるように説くときに、この習慣は子供たちの注意力を培い最も重要な主題に関する考えの個性や不完全なところを両親に開示するのに最も役立つものだ。レイチェルと私の最初の試みの時、私は最初からとても勝ち誇ったような気分

だった。私は文章を思い出し頭の中にはその説教の考えでいっぱいになっているようにも思えた。私は大きな石板全体に走り書きをしたが、自分が書いたことがすべて母の手書きの7行か8行に相当することに気づき、少なからず恥ずかしく思った。私はだまされていないことを確認したが、私の壮大な「説教」が何の役にも立たなかったことを知り落胆した。しかし、私の試みは承認された。私は「夕食まで座る」ことを許可されて日曜日の練習が始まった。それは耳が聞こえなくなり私の注意力が保てなくなるまで続いた。その長い数年間は私たちの成長はわずかしかなかった。というのもマジ氏（我々の牧師）の説教は優しく厳粛な印象を与えるもの子どもたちに明確な考えをほとんど伝えなかったからだ。カーペンター博士<sup>2)</sup>の説教は私が今まで聴いた中で最高のものだった。（私は当時16歳だったといことがカーペンター夫人に宛てて書いた「回想録」を今でも好奇心旺盛に持ち歩いているのを知っている）——彼の説教は一文たりとも聞き手の解釈にまったく欠けたところがない——そして私たち子供がニューカッスルから持ち帰ったもう一つの宗教的な印象は、今でもとても魅力的なものだ。（p.34）優しく繊細な叔母のメアリーは、白いガウンを着て、ピンク色の細い絹のような茶色の髪をしていて、私たちに対する優しい態度で、西日が差し込むフォースの窓際の席に座って私たちを膝まずかせ、ミルトンの賛美歌「喜ばしい心で私たちを歌おう」を歌うことを教えてくれた。それはまさに子供のための賛美歌であり、シンプルな曲調に設定されていて私にはいつも、今日でも、メアリー叔母さんの細くて真剣な声が聞こえてくる。それは穏やかな賛美歌だった。私に悲痛な息を吹き込んだのはドイツの夕べの讃美歌だった。私の全身を目覚めさせずにはいられなかった英雄的な言葉は「目覚めよ、私の魂よ、私の魂よ。」だった。それは「すべての神経を張りめぐらせ」とアルタクセルクセス<sup>3)</sup>に向かって歌ったものだ。当時、私たちはパーボール夫人の散文賛美歌を暗記した。それは私が心から愛した部分もあったが私を畏怖の念で震えさせることもあった。私は「揺れる沼」が何であるかを知らず、その謎の存在「死すべき子供」に驚いていた。しかし全体として宗教は私にとって大きな慰めであり喜びだった。そして、アン・ターナーが私たちと一緒に南へ行き、告白と朝と夜の祈りを勧めてくれた時から、私は新約聖書を非常に熱心にそして有益に学んだ。

## 第二期 17歳まで (p.35)

それから間もなく、私は非常に役に立つ課題に取り組んだと思う。私の心は、家族から鈍く、観察力がなく、扱いにくいと思われていたが、絶望的なほど几帳面だった。私にとってすべてのものは、それを認めるようなリストにされなければならない。かくして私は、フランクリン博士のその

---

<sup>2)</sup> Lant Carpenter (1780-1840) はプリストルのユニテリアン学校の教育者。娘のメアリー・カーペンターはイングランドで最初の女子の孤児院を設立した慈善事業家。マーティノウ家ではハリエットと弟のジェームズが2人だけカーペンター博士のプリストルの学校に入ることを許された。弟のジェームズはカーペンター博士の下で代理の牧師を勤めた後にヨークで資格をとり著名なユニテリアン派の牧師となる。

<sup>3)</sup> ペルシア王アルタクセルクセス1世（在位：紀元前464～425年）

日の美德と悪徳を見出しにして徹底的に追及するという青っばく不条理な計画を大至急採用した。すぐに私は道徳的資質を解析することの難しさに気づき、それをあきらめなければならなかった。彼（フランクリン）も同じだったと思うが。しかし私は愚かにも途方もない忍耐力で挑戦しようとした。美德と悪徳の見出しに聖句の指示を配布し励ましや叱責をいつでも手元に置いておけるようにするのは良いことだと考えた。それで、私は（多くの場合によくやるように）紙の本を作り罫線を引いて、きちんと見出しをつけて書いた。旧約聖書についてはとてもうまくいったのだが、新約聖書の難しさには驚いた。私はそれが古いものよりもはるかに価値があり、重要であることを知っていたのだが、型にはまったことが少ないことを説明することができなかった。(p.36) それで私はあきらめる前に意味や言い回しを捻じ曲げ、比喩的なものを教訓にした。しかし聖典を自由に使用する点において古いピューリタンの説教者に匹敵するほどだったので、私は自分の望む体系を構築できないことを自覚せざるを得なかった。かくして私は思考と知識の過程において、ユダヤ教が戒律的な宗教であるのに対し、キリスト教は主として原理の宗教であるという大きな一歩を踏み出したのである。そう思いこんでいたのかもしれないが。

過去何年もの間、ユニテリアン派が子供たちにキリスト教教育を与え、彼らの宗教的訓練をあるがままにしていると考えることに私は絶えず驚かされてきた。私たちの家族は、確かに非常に強くそして非常に誠実にキリスト教徒であることを主張し、正統派を軽蔑し哀れんだ。しかしそれは素晴らしい思考の怠惰と無知からきたものであったに違いないが、私たちはユニテリアン主義を、いかなる真の意味でも、キリスト教の分離を正当化できるようなキリスト教であると受け止めることができた。私たちの特別なケースでは、家族の誇りと愛情が反対意見に関係していた。驚嘆すべきは反対意見ではなく、ユニテリアン主義に墮落したことだった。私たちのフランス語の名前は、私たちの起源を示している。私たちが知っている初代マーティノウ氏は、ナントの勅令の撤回<sup>4)</sup>でノルマンディーから国外追放されやってきたユグノーだった。彼らはもちろん、カルヴァン主義者であり、キリスト教が贖罪の計画であることを全面的に認め、制限や濫用なしのキリスト教徒の称号に値するほどだった。(p.37) しかし、彼らの子孫は、彼らが属する会衆とともに、自然な感覚でキリスト教の教義の本質的な点から反抗した牧師たちの指導のもとに、カルヴァン主義は最初にアリウス派の疑似キリスト教となり、次にユニテリアン主義へと移行した。彼ら（ユニテリアン）は聖書的、教会的、歴史的、哲学的など、自分たちが放棄するのは本当に不可欠であり、キリスト教という名前が自分たちが保持したものに付け加えるには単なる見せかけにすぎないことを発見するのに十分な学習をしていなかった。私が子どもだったある晩、私が客間に入ったとき、私たちのユニテリアン牧師であるマッジ氏がたまたま私たちの訪問者だった正統派学校の校長先生に対して誤りの有罪判決していた（さらに彼は愚か者と呼んだ）。「ほら、見てごらんなさい」とマッジ氏は言い、3つのワイングラスをつかみ、一列に並べて、「ここに父がいて、ここに息子がいて、ここに聖霊がいる。この3つのグラスは、いずれにせよ1つになり得ると言いたいのですか？ まったくナンセンスだ」と。そして、私たち子供は、それが「ナンセンス」であると教えられた。私は本

---

<sup>4)</sup> フォンテンブローの王令 ルイ14世がおこなった

当にノリッジの人々の大多数がそのような無意味なことを受け入れられたことが非常に不思議だと思った。そして、都市のユニテリアンたちのようにそうした無意味さを見抜く者はほとんどいなかったが、この問題には私たちが見た以上のものがあるかもしれない、あるいは私たちの牧師でさえ気づいていた以上のものがあるのかもしれないと私に示唆する人は誰もいなかった。これは十分に有害なことだった。しかしユニテリアンの間で必然的に普遍的に行われている自分たちが受け取ったと公言する啓示によって自由を奪う慣習は悪質だった。聖書は啓示そのものではなく、それは真実であり記録であると彼らによって非常に適切に宣言されているが、確かに啓示を得ることができるのは記録を通してのみである。(p.38) そして記録の改ざんは啓示自体に対する操作である。少なくともプロテスタントにおいては。このような手順の効果を十分に理解するには私の若い頃にユニテリアンが何をしていたかを見るだけで十分である。彼らは改良版を発行していたが、かなりの部分を偽りだとして脇に置いた(別の活字で印刷されていた)。確かにそれらの部分は日付やその他の事実に関して他の部分と完全に矛盾している。しかし、ユニテリアン派の浅薄な学識はそのような過程が神の啓示の記録である聖書の概念とまったく矛盾していると認識することなく何を受け取り、何を拒否するかを独自に選択した。切り取り、変更し始めれば立ち止まる理由はなかった。そしてすべてのユニテリアンは聖書の意味を自分の見解に適合させる自由を持っていた。ベルシャム氏の書簡の解説は、この点で注目に値する現象である。天国と地獄、世界の終わり、救いと滅びなどに関するいくつかの困難を取り除くために彼は計り知れない忍耐力と、これほど徹底的に散文的な人間を表現する際に注目に値する詩的創意工夫によって一連の比喩的な意味を考案した。その間ずっとそれが人類を滅亡から救うために計画された啓示であるはずもなく、18世紀を経てその説明にはベルシャムの手によるこうしたすべての創意工夫が必要だったなどということは彼には到底思い浮かばなかったようだ。私はイギリスのユニテリアンと同じくらいこれらの分厚い本に深い興味を持った読者だった。彼らの創意工夫は私の能力の一部を非常に満足させたがずっと頭から離れない非現実感が私を不安にさせていた。この種の厳粛な慰安は、私の人生を悲惨にしている良心の厄介な問題や道徳的イライラの治療にはふさわしくないという意識があった(p.39)。この神学的な散逸と、詩篇と賛美歌の音楽と詩が、その時間の間私の悩みを魅了してくれた。しかしそれは私が必要としていた確かな慰めではなかった。それで私は自分のやり方で、何度も何度も新約聖書を研究し「ハーモニー」を作り、地理をくまなく調べ、解説と解明の方法で見つけられるすべてのものを貪欲に集め、聖典の中で見つけた道徳的な美しさと精神的な約束に喜んで熱中した。私は多かれ少なかれキリスト教の「本質的な教義」、つまり神は人間の罪と滅びへの運命づけ者であり、キリストはその破滅からの救い主であると表現していることを信じたことは一度もない。私は人の滅びが正義であり人の贖いが慈悲であるという言語の策略に多かれ少なかれ惑わされたことは一度もなかった。私は地獄の恐怖に多かれ少なかれ苦しんだこともなかった。両親のユニテリアン主義が私を救ってくれたのだ。しかし、新約聖書の中でこれらの教義についての議論の余地のない記述を多く見つけることへの当惑から私を救ってくれるものは何もなかったし、幸せにするものを選んで選択し何を拒否するかということは福音に対して途方もない自由を奪っている、という密かな感覚から私を救うことはできなかった。天国を受け入れ、地獄を拒絶し、キリストと地上の使徒たち

の統治をどうにかして取り除き、星々の中の天国をどうにかして空想し、旧知の人々と住み、お気に入りへの追求を取り付けるユニテリアン派を不思議に思うとき、私は同じことをしていた長い年月を振り返ってみようと思う。(p.40) 私は人生の後半になって、あの世でソクラテスの列車に乗り込み、ピタゴラスから彼の秘密のいくつかを引き出すと自信を持って言ったのを思い出そうとしている。さらに私が特に傾倒したすべてのキリスト教徒の価値ある人々と友情を築くと自信を持って言ったことを思い出そうとしている。今、私の初期の頃の同志たちが、明確に規定された条件に悩まされることなく、キリスト教の約束をすべて快適に流用しているのを見るとき一救い主としてのキリストへの信仰について—私は、これがまさに私の人生の前半に私がやったことなのだと自分に言い聞かせる。彼らが、そして当時の私がどうして自分たちの宗派の運勢が停滞あるいは衰退しているということが理解できたのかという不思議は今でも残っている—ユニテリアン主義が、結びつきと習慣から、すべての必須条件が実際には剥奪された状態のもとで、神の啓示と信仰という古い特権にしがみついているだけであることは明らかなことである。

20歳までの私の宗教的信念は、簡単に言うところのものだった。私は、正統派の神よりも温和で慈悲深く、情熱のない神を信じていた。その神が、創造物を永遠の苦しみに陥らせることはないからだ。私は悪魔を信じたことは一度もなかったと思うが、聖書がその名のとおり永遠の罪について刑罰の名の下に永遠の害についても語っていることを理解していた。私は神聖さがもたらす計り知れない永遠の報酬を信じていた。しかし私はこれまでの人生で正しいことをしたことは一度もなかったし、報酬や罰を考慮して間違ったことを避けたこともないと確信している。私の記憶の限りでは、私はいつも罪と後悔を極度に恐れていたが、罰はまったく恐れていなかった (p.41)。しかし、それどころか罰やそのほか良いものを与えてくれるような何かを望んでいたけれど、それは無駄なことだった。—良心の安らぎ、悔い改めによる許しの教義は、私にはあまり役に立たなかった。なぜなら、過去の許しは、将来の安全がなければ何の役にも立たないからだ。そして、私の罪は、その結果を一度でも赦されたとしても—結局は癒すことはできないと私は感じた。もしそのような癒しが可能であれば。たとえば私が祈って泣き、夜に赦してもらえることを願ったとしても、それはささやかな慰めだった。なぜなら、次の正午までに再び後悔の念を抱くはずだとわかっていたからだ。主の祈りの許しの条項が私にとって困惑やつまづきの石ではなかった頃のことは覚えていない。罰が免除されることは気にしていなかった。私は良心の呵責を感じたかった。それは成長することによってのみ可能だったが私は毎日自分自身を憎み、軽蔑していた。キリストに対する私の信念は、彼は神の下ですべての存在の中で最も純粹であるということ。そして人類のための彼の苦しきは、私の考えと私の愛情において、彼を他のどの存在よりも崇高なものにした。聖霊は私にとって単なるフィクションだった。すべての奇跡を事実として受け入れて希望どおりに一部を「偽り」「補間 (interpolation)」などとして断念してからかなり経ってから、聖書の文字を崇拜しようと考えた。私は未来の世界は、新しい存在の方法としてではなく、現在の継続であると信じていた。そして、肉体の復活と魂の不滅が両方とも真実であるはずがないことを知ったときから、私は前者、つまり聖パウロに倣った。私はキリスト教が人種の救済にほとんど貢献していないことに不快なほど動揺したのだ。(p.42) しかしその困惑は私が大多数の人間の滅びを信じていたほど深刻ではな

かった。そして残りの部分については、キリスト教世界そのものだけに自分の見解を固定しようと工夫した一クリスチャンは一般的に、その困難の中に大きな資源を見いだす。そして公の崇拜、神聖な音楽、ミルトン、そしてビルグリムズ・プログレスの助けを借りて私は宗教が私の最良の資源であることを発見した。それは私が徐々に語るように、より良いものへの道を錬成するまでの最初の一貫性のない、不満足な形ではあったけれど。

私が7歳の時、ニューカッスルから戻った後の冬、ある日曜日の午後、私は何らかの病気で礼拝堂から遠ざけられた。礼拝堂の信者の後ろでドアが閉まると、私はテーブルの上の本を見た。その本の中でも最もぼろぼろの状態のものが開かれていた。そして、私がそれをめくったことは私の人生の主要な出来事の1つだった。その地味で武骨な、子牛革の装丁の本は「失樂園」だった。ありふれた青みがかかった紙は、昔ながらの活字で、私にとっては天国からの巻物のようだった。私が最初に見たのは「議論」だった。私はそれがまったく愚かな論争を意味するものだと理解した。しかし、サタンが混沌を切り裂く内容に私は何かを感じとり、それが私を詩に向けさせた。そして私の心の運命はその後7年間決定づけられた。それ以来その本は見つからなくなったが、若い知人が私に自分の小さなミルトンをプレゼントしてくれた。私はその後の数か月後には、『失樂園』の中でわからないセリフはほとんどなくなったと思う。私はそれを繰り返し繰り返し読んで眠りに落ち、朝、カーテンが引かれると、天の光の描写が記憶によみがえった。これは私にとって、知的資源による精神的救済の初めての経験だったと思う。(p.43) その時から私はきっといくらか幸せになっていたに違いない。ただし私が完全に確信している事実の1つは、その改善が十分ではなかったはずだということを示している。アン・ターナーと彼女の私に対する宗教的訓練によって、いわば私自身の道徳的責任が課せられたときから、私は自分の惨めな習慣、特に泣くということを取じていた。私は長い年月をかけて、8歳から14歳くらいまで、泣かずに一日を過ごそうとした。私は忍耐強い子供だった。一生懸命頑張ったが失敗したのはわかっていた。そしてとうとう諦めた。その間泣かない日は一日もなかったからだ。もちろん、私の気性や心の傾向が悪すぎたのだろう。私は、陰気で、頑固で、意地悪さに耐えられない子供だったことは間違いなかった。それでも、自分自身の順応性、つまり最初の言葉や優しさの口調にすべてを委ねてしまう自分の弱さを思い出すと、この事件には重大な間違いがあったと信じざるを得ない。そして、もう少し同情と精神的支援があれば私や他の人の恐ろしいほどの過ちと苦しみは免れたと信じざるを得ないのだ。その間私が11歳の時に起こった小さな出来事が、私の解放を予感させるものだったかもしれない。長兄のトーマスは私より7歳年上だった。彼は概して寡黙で控えめで、ラテン語の文法を教えた私たち若い兄弟たちにはやや厳格だった。私たちは、彼への畏敬の念の中で彼を熱烈に崇拜し、愛していたが子供の頃、ラテン語のレッスンでダジャレを言って、彼の意に反して彼を笑わせたことがあり（これは大成功だった）、(p.44) 一度彼に本当の困難を打ち明けようとしたが、結果はうまくいかなかった。夏の夕方の散歩中、私は彼のそばにいることに気づいた。その時何かが私に勇気を与えてくれて彼に尋ねた——（18歳の人に！）——私が長い間密かに考えていた質問を——もし神がすべてを予知しておられるのなら、どうして私たちは自分の行為を非難されたり、報いを受けたりするのだろうか。彼は少し考えてから、優しい声でこれは今の私には理解できないことだし、これからも長い

間理解できないことだよと言った。私はあえて怒らなかった。しかし私はがっかりした。そして、その困難を感じる事ができたら、私には解決策を得る権利があると感じた。間違いなくこの答えの拒否が私の心の中の疑問を解決するのに役立った。

この時までには私は自分自身に対して道徳的または精神的な責任を負い始めていたと述べたが、私はそれを改善するために一生懸命努力した。しかし、私はほとんど進歩していないのではないかと心配している。毎晩、私はその日の考えや行動を振り返り、悔い改めようと努めた。しかし、どんなになおしても自分を慰めることはめったになかった。しかしその間ずっと、日々の状況は私自身にはできないことを私に代わってやってくれていた——あれ以来、それが絶え間なく起きていることがわかった。私の人生における最初で偉大で健全な教育は、私が8歳くらいのときに(よくわかっていないが)始まった。ドラモンド氏の講演会で私を膝の上に乗せてくれた親切な女性には、レイチェルと私と同じくらいの年齢の二人の女の子がいたが、その出来事の後、私たち子供は知り合いになり、すぐに(家族がマグダレン通りで私たちのそばに住むようになったとき)限りなく親密になった。私が7歳の時、マーケットプレイスの彼らの家にいたのを覚えており、(p.45)小さなEちゃんは、非常に足が不自由だったので魔法のランタンを見るために立ったり座ったりすることさえできずに父親の腕に抱かれていた。その年が終わる前に、彼女は足を失った。彼女は物静かな性格の子で、病気で手足が著しく衰弱していたので、おそらく手術でもそれほど苦しむことはなかったのだと思う。それがたとえそうであったとしても、彼女は大いなる勇気を持ってその機会に立ち向かい、驚くべき冷静さでそれを乗り越えたので、彼女は町中の話題になった。私は当然のことながらこの事件にとっても深く感銘を受けた。それは私の想像力を著しく肉体的な苦しみと、その方向への不屈の精神に付随した独特の榮譽に向けた。私の神経系はひどく傷ついており、特にその後の難聴は、友人のEちゃんが足を失った後の何年もの間、私が興奮していた刺激的で虚栄心に満ちた夢が一因であったことは確かだ。火あぶりや足場でのありとあらゆる死を、私は想像の中で、聖テレジアが殉教を切望した低義の意味で通り抜けた。そして、夜な夜な冷たい汗をかきながら横たわり、疲れ果てて眠りに落ちた。今考えると、これらすべてが嫌な思い出が真実を語ることは人としての義務である。なぜなら親は自分たちが最も恥ずかしいと思うこと、つまり自分たちの願望について、小さな子供たちの信頼を勝ち取らない限り、子どもたちの想像力の中で起きていることをほとんど知らない傾向にあるからだ。私のこの贅沢な悩みの良い面は、生まれつきとても敏感でイライラしやすい子供には求められない苦痛と窮乏の中での忍耐力を引き起こし、強めてくれたことだった。実のところ不屈の精神は私の最もお気に入りの美徳だった。(p.46)そして、幼少期に非常に異常な量の身体的痛みを静かに耐えることができた力は、想像力の方向転換によって被った多大な不利益に対するわずかな代償として私が享受したものだ。しかし、これは、私がEちゃんとの交際から生じた私がいうような教育ではない。彼女のような場合、世界中の人は彼女の両親の見方と行動方法を黙認する。そして、その場合、両親は悲しい間違いを犯していた。両親は事実を不自然な沈黙で隠蔽することで、娘の病気による苦しみを大幅に増大させた。Eちゃんの足の引きずりについては彼女が皆より完全に遅れをとるまでは、私の記憶の中で一度も言われたことも、認識されたこともなかった。彼女は他の子供たちと同じだと当然思っていたのだ。そしてその妄想は、

私の遊びを犠牲にして遊び時間中続けられた。Eちゃんと私が親密になった時から、私は一度も遊びをしなくなったと言えるかもしれない。その時私は遊びが好きだった。他の子供たちが遊んでいる間、Eちゃんが私の腕にもたれかかりながら、私が冷たい足と憧れの心で立って見ていた長い長い月日を今振り返ると、本当にわからなくなる。Eちゃんは歩くのが極度に困難だったので、彼女と一緒に散歩に行くのは、私にとってはひどく不安だった。私は内気な子供だったので通りにいるすべての人が私たちを見つめているのではないかと想像した。しかし二つの出来事によって引き起こされたこの苦痛から判断するなら拒否したり不平を言ったりすることを決して考えなかった長い自己否定は、私にとって道徳的に良いものであったに違いない。—今の私には、単なる欠乏から生じるすべてを飲み込んでしまうような痛みである。—Eちゃんと一緒に歩くことの疲労は、彼女が極度のサポートを必要としていることと、常に同じ側にいることから、非常に大きかった。私は決して体が強い方ではなかった。(p.47)そして急速に成長する一方で、Eちゃんが片腕を絶えず引っ張っていたため、私は悲しいほど曲がって成長していることがわかった。母がEちゃんの母親に、私が曲がって成長してしまったから一緒に歩いてはいけないとどうして言ったのか私には全く理解できないのだが、この不謹慎な出来事は長年の遊びの窮乏よりも多くの苦痛を私に負わせた。そのヒントはすぐに理解されたがEちゃんが他の人に割り当てられているのを見るたびに、私は恥ずかしさと後悔を繰り返した。そして私はそのような葛藤によって逃れることよりも、むしろ曲がってしまったほうがましだったと思った——もう一つの出来事はこうだった。私たち子供たちは誕生日パーティーを開くことになっていた。そして父は私たちに、ボンバシン<sup>5)</sup>が保管されている倉庫や梱包箱や鳩穴の間でかくれんぼをするという、珍しく貴重な自由を与えてくれた。何週間もの間、私はこの誕生日とこの劇が始まるまでの日と時間を数えていた。しかしEちゃんはかくれんぼをすることができなかった。そして私たちはその場所に立ってなりゆきを眺めていた。私は寒くてそわそわして、全然遊んでいないのに時間が過ぎていくと思うと、どうしようもなく不安になった。そして私は致命的なことをしてしまい、それ以来ずっとそれは私の心の中に刺さっていた。私はEちゃんに、一度隠れている間、少しの間だけ誰か他の人と一緒にいてもいいかと尋ねた。一度だけ。いや、——彼女は気にしなかった。それで私は別の人を彼女のところに送り、今となってははっきりとした自己嫌悪の感情を抱きながらそこから逃げた。しかし私にはゲームの心得がまったくなかったのですぐに捕まりEちゃんのところに戻ってきた。——その後の私たちの友情では私の自尊心は失われた。ただ私は彼女に多大な借りがある。(p.48)そして、彼女と彼女の不幸は、私が自己管理に身を投じた後に、私が受けた恩恵の最も好ましい影響の一つだった。私は、彼女が自分のケースを受け入れ、自分の弱さについて沈黙することに終止符を打ったその後の人生における彼女の気性ほど素晴らしいものはない、と付け加えることにとっても喜びを感じている。「聴覚障害者への手紙」を書いた後、私たちは弱さを抱えながらも親睦を深めたように思えた。それから数年後、私が「クロフトン・ボーイズ」を書いたとき、このような事件<sup>6)</sup>について私の（彼女につ

---

<sup>5)</sup> 綾織の布

<sup>6)</sup> 物語中で男の子が足を怪我するという内容

いての：筆者）明白な知識が彼女の気持ちを傷つけるのではないかと不安になったとき、私は彼女に不安の告白の手紙を書いた。彼女は自由で、陽気で、寛大な最も魅力的な手紙で返信してくれた——私はこのような手紙のおかげで今のように書くことを励まされている。

1811年は私にとって特別な年だった。まず、夏から秋の間ずっと健康のために田舎に送られたこと。そして次は、私の家族の中で最も愛される人、妹のエレンの誕生だった。——その夏、それは農家での本物の田舎暮らしではなく、裕福な弁護士の家での最も制約されたありきたりな生活だった——父のいところで、健康のために行った私と交換条件で、市の有力者たちの便宜を図って彼の娘を我が家に送った。私はまったくそこに満足していなかった——確かにこの時点で私がどこにもいても満足していなかったことは明白だった。逃げたいという昔の思いが強く甦り、いつものようにいくつかの譲歩と親切の言葉が私の目的を台無しにしたとき、私はそれを試みようとしていたまさにその瞬間のことだった。私はその統治者が大嫌いだった——それには十分な理由があった。(p.49) 初日、彼女は私を黙らせ町育ちの私が雑木林とは何であるかを知らなかったなどという理由で罰を与えた。「向こうの雑木林の近く」などと言ったことに対して。彼女は、雑木林が何なのかを誰もが知っているはずだから私は頑固で嘘つきなのだと主張した。最初からこんな出来事の後では、私たちの関係が友好的でも有益でもないことは容易に想像できるだろう。彼女は今、私が学校の知識において生徒たちよりも先にいることに嫉妬している様子を見せた。彼女は毎日、私の正義感を、明白に、そして最も目的意識的な方法で憤慨させた。彼女は徹底的に品が無かった。そして数週間後に彼女は送り出された。——あの場所で私が覚えている煩わしさの一つは、ダイニングルームの隅にある小さな椅子に座って本を読んでいたとき、私自身について小耳に挟んだささやき声だった（今となっては非常に奇妙に思えるが）。私の女主人は、私がいなかったら普通の大きさの声で言ったかもしれないが、朝の訪問客に私の素晴らしい読書愛についてよくささやいていた。私が素晴らしい説教を書いたのだと。その間彼女はそれをごまかすふりをして、ウインクしたり小突いたりして、「本を読んでいるとき彼女は何も聞こえないのよ」「この年齢で本当に素晴らしい説教を書いたのよ」などと言っていた。私はエリコ<sup>7)</sup>でのあの説教を百回したかったのだが実のところ、私はそれを心底恥ずかしく思っていた。それは「使徒行伝 (The Acts)」からの、聖パウロの冒険の単なる物語にすぎなかったから。そして私は、それが福音書の一連のたとえ話であるのと同じで、説教ではないことを知っていた。

その夏には、田舎での楽しい楽しみがいくつかあった。私は栗が鞘から飛び出し、秋の紅葉の中で輝いているのを見たことはなかった。女主人が訪問している間、子供たちが大通りで栗を拾った古い邸宅のことを思い出す。(p.50) それ以降私は果樹園とリング狩り、そして花の咲く小道が大好きだった。本当のことを言うと私のあの夏の思い出は『ディアブルック』<sup>8)</sup>の中にあるかもしれないが、私は今まさに（以前と同じように）登場人物たちは現実のものではないと断言する。多かれ少なかれ、実際の登場人物からの示唆は確かにある。しかし、主人公（イギリス人ではない）を

<sup>7)</sup> 旧約聖書「ヨシュア記」のエリコの戦いの記述。モーゼの後継者ヨシュアがカナンの地に入るためにエリコの城壁を破って戦争をする物語。

<sup>8)</sup> ハリエット・マーティノウの小説 *Deerbrook* (1839)

除いて、「現実の生活から来た」と指摘できる正当な人物は誰もいない。風景に関しても、あの荒涼としたノーフォーク地区よりもグレート・マーロウの方が多くあるが、新鮮な田舎の印象は間違いなく後者から来ている。そこで私は、他のところで詳しく述べた貴重な経験を少しだけ手に入れた。——それは自然の営みの中に手を入れてそれを変えることだ。朝の散歩の後、私たち子供は庭に植えるために野生のイチゴの根を持ってきた。悲しいことに、家に帰る頃には植物は枯れていた。そして、暑い正午になって、庭の土は暖かく、乾いていて、根を張るチャンスはなさそうだった。私はそれを植え、そのたるんだ葉を嘆き、水をやり、小さな子供用の椅子を手に入れ、それを避難所として植物にかぶせ、椅子の穴を草で塞いだ。夕暮れ時に見に行ったら、植物はすっかり新鮮になっていた。そしてその後、とても順調に育成した。こんな些細なことを長い間覚えていたというのは、その時の私の驚きと喜びがとても大きかったからだろう。そして私には、自然のプロセスを修正する力があると知った瞬間から、自然を別の目で見えていたと今は確信している。

(P.51) 11月に、私が予期していたニュースが届いた。すぐ上の姉のレイチェルは私たちと一緒に二週間田舎に滞在していて、私たちが戻る前に家に赤ちゃんがいることを知っていた。彼女が赤ん坊の名前を知りたいと手紙で熱心に迫ったが断られたことを覚えている。私たちは赤ちゃんが生まれるまで待つように言われたからだ。ある晩ついに配達人が私たちに妹がいることを知らせる手紙を持ってきた。私はまだその名前を知りたいと思っていたが、もう一度聞く勇気がなかった。私たちの主人は私の心の中にあるものを理解してくれた。それから1～2日後、彼はノリッチに行き戻ってきて赤ちゃんの名前が決まったから気に入ってほしいと言った。——「ベエルシェバ」私は彼の言うことを信じるべきかどうか分からなかった。そして私は「ローズ」に心を決めた。しかし、「エレン」は私をとて満足させた。——以前はホームシックになっていたが、今では憧れのあまりにそれがひどくなった。私は、これまでのすべての問題は完全に私のせいであると確信し、これ以上の問題はあってはならないと本当に決心した。とは言え、その後も頻繁に（家を出るときと同じように）私は失望する運命にあったけれど、今でもよく覚えているような口論が始まるまで、私は自分がくつろいでいるとはほとんど感じなかった。——私ではなく、男の兄弟たちが厄介で、特にジェームズがやんちゃだったからで、一番上の姉は怒って叱った。そのとき私は、新しい妹に自分の幸せを探してやろう、そして、私が決して見つけられなかったような優しさへの切望の思いを彼女がもってはいけなさと決心した。この決断は、通常、一時的な感情から生まれた決断というよりも、むしろ予言のようなものとなった。その子はそれ以来、私にとって新しい命だった。私は彼女に惜しみない愛と優しさを注いだ。(p.52) そして彼女は自分自身の悲しみ以外に、一瞬たりとも私に苦痛を与えたことはないと言えるほどだった。彼女の人生には多くの苦しみがあったけれど、そのような同情的な痛みは、40年以上にわたる私たちの親密な友情の間で、彼女が私の中でときめかないような感情に比べれば至福のものだった。私が初めて彼女に会ったのは、レイチェルと私を家に連れ帰ってくれた亡き女主人に見せるために、生後二週間で眠っている彼女をベビーベッドから引き上げたときだった。その瞬間から私が彼女に対して感じた情熱的な愛情は、私がこれまでの人生で感じたこととは全く異なっていた。とはいえ、私は少なからぬ甥や姪を人形のようにかわいがってきた。しかし、私にとって彼女は執着するよりも追求するものだった。次の夜、ゲートハ

ウス・コンサート（毎週行われる平服で行くコンサート）で若い女性に、人間の心の成長を赤ちゃんの時から見るべきだと言ったのを覚えている。私が彼女にこのことを話したのは、多かれ少なかれ私に同情を示してくれた人全員に対して、私は非常にコミュニケーションがとれていたからだ。数年後彼女が9歳の子供のそのような言葉をいわれ非常に心を打たれたということが、街中に広まり、誰か大人が私に吹き込んだのだろうと繰り返し言われたことが分かったが、それは完全に私自身の本物の言葉だった。私の好奇心は強烈で私の余暇はすべて子供部屋で、赤ちゃんを見つめる、文字通り見守ることに費やされた。より早く余暇を得るために全力を尽くしたレッスンにおいてこれは私にとって大きな刺激となった。すでに述べたように私が聖書を生活の規則から切り分けようと考えたのはその時からで、私がそれをおこなったのは主に子供部屋でのことだった。ナースメイドと赤ん坊の向かい側の椅子に座りメモを取り、立ち上がって子供にキスをした。(p.53) ワクチン接種を受けたときや小さな病気にかかったときのように、苦い瞬間や時間もあった。そのとき私の心は張り裂けそうになり、自分の部屋に行き、ドアに鍵をかけて長い間必死に祈った。そのとき私は、ピューリタンが「祈りの中で格闘する」ということが何を意味するのかを知った。—2年以上にわたって私を苦しめた消えない不安の1つは、この子が愚かになってはいけないということだった。もしそうでなかったとしても、この小さな生き物の前でどれほどの大変な労働があったことだろう。私が今フランス語を学ばなければならないのと同じように、彼女も話すことを学ばなければならないということ以外私は考えていなかった。一語一語が明白な努力によって、もし私が10歳と11歳で語彙がそれほど難しいと感じたのなら、この幼児はどうやって英語全体を学ぶことができるだろうか？最初はあまり教えずに、そしてその後は何も教えずにいたのに、彼女が毎日新しい言葉を披露しているのを知ったとき、その不安は驚きとともに消え去った。私は彼女が労力を惜しまないのを見るのと同じくらい嬉しかったし、彼女の可愛らしいお喋りでの言葉の使い方を面白がっていた。

田舎の滞在から戻ってからはほぼ2年間、レイチェルと私は自宅で家庭教育を受けた。私たちの長兄は私たちにラテン語を教え、次の弟のヘンリーは書き言葉と算数を教え、姉はフランス語の読み書きと演習を教えてくれた。ラテン語以外は、私たちはあまりうまくできなかった。姉は、道徳的にも知的にも、私たちに多くを期待しすぎていたし、彼女自身も、教師としてそれほど多くの資源を持っているわけではなかった。しかし私たちは彼女のおかげでフランス語の文法（特に動詞）を徹底的に基礎づけることができ、それはその後学校で私たちに大いに役立ったし、同様に兄から得たラテン語文法の基礎も同様だった。ヘンリーに関して言えば、彼は私たちに算数などの授業をしてくれて (p.54) 彼の悪ふざけと変な厳しさは私たちをひどく苦しめた。彼はみんなに危害を加えるつもりはなかったが学校の先生を演じるには若すぎた。彼の退屈な拷問システムによる頭や心臓のドキドキが軽減されなければ私たちは事態を改善することができなかった。彼らを代表して言わなければならないのは、私自身、おそらく最も将来性のない生徒に見えたに違いない、つまり私の知力は恐怖と恥ずかしさで完全に混乱していたということだ。心の余裕がなかったので、私には定義することができなかった。事前に準備できる授業以外のことはすべて、このクラスでの居場所を私は失った。そしていつも思ってもいないことを言って時間、エネルギー、お金、そして期待を最

も無駄に浪費したのは、音楽に関することだった。自然は私をあらゆる意味で音楽家にしてくれた。今まで私は調子を外して歌うことは一度もなかった。20歳の頃の私を知っている人は皆、私の演奏について良い説明をしてくれると信じている。私が今まで試みた音楽の中で、理解できないものではなく、実行できないものもなかった—ただ誰にも聴かれないというのが不可欠な条件なのだが。教育には多くのお金が費やされた。そして、音楽を身につけるのにどれだけの時間を費やすかを考えるのは本当に嫌なものだ。私の母は音楽が大好きで、彼女が決して得られなかったこのような方法で私に大きな満足を求めていたことを私は知っている。私の聴覚障害により、ついにそのような期待はすべて打ち砕かれたけれど。しかしそのずっと前から、私の音楽は私にとって悲惨なものだったが、別の意味では私の最大の喜びでもあった。私の音楽の先生はノリッジ大聖堂のオルガニスト、ベックウィズ氏だった。——彼は立派な音楽家だった。ただとても短気なので、私のような内気な女の子にとっては最悪の先生だった。彼が生徒の指の関節を叩いたために一つ以上の学校から解雇されたことは知られていた。そして耐え難い叱責のせいで謝罪せざるを得なかったことも。これらのことはどちらも私たちの家では起こらなかった。しかし実際には、本当に彼は彼らにそうしなかったのではないかと時々疑問に思った。彼が私のひじのところにいたとき、私はとても大げさに演奏したり歌ったりしていた。指はけいれんを起こしたように絡み合い、声は喉に綿毛が入ったかのように嘎れ声になった。時々彼は私の耳を褒めてくれたが、彼は私には音楽のテキスト以上の心はなく、ピアノの蓋以上の感情はなく、煙突の一部分以上の心はないと私によく言った。そして、私に何かを教えようとしても無駄だと思っていた。この間ずっと私が一人でヘンデルを歌っているときに、私が気づかないうちにたまたま部屋のドアが開いていて母が自分の歌に涙を流しているのが見え、そして私は、今ならわかるかもしれないが、自分自身かなり気分が良くなったと感じた。私が自分だけを信じていたときには自分の声で私の前に天国が開けた——私の歌の先生が決して聞いたことのないようなその声で。彼の場合に私は初めて自分の恥ずかしがり屋が引き起こすはずらの程度を完全にそして突然知ることになった。彼のレッスンは週に2回だった。その日は朝起きるのは努力であり、惨めな日を迎えることだった。そして午前中は彼がいなくなる夕方のことを考える以外は何もできなかった。その後の3日間、いや4日間は私の邪魔にはならなかったが、時間はどんどん重くなり、私の心はますます動揺して夕食を食べることができなかった。そして彼のせつかちな大きなノック音は、歯医者者の椅子に座るよりも辛かった。週に2日そのようなことがあり、彼がいなくなった後の夜の至福によってさらにそのような感情は強まってこれが大惨事の原因になったかもしれない。ただ私のショックはそれほど大きくはなかった。(p.56) ベックウィズ氏はどんどん痩せ細り、髪と髭はどんどん黒ずんで見え、休日が近づくにつれて、一週間か二週間は家を空けるのが習慣になっていた。ある日、誰かが私たちと一緒に食事をしていて、私が父の隣のテーブルの一番端に座っていたとき父は母に言った。「可哀そうにジョン・ベックウィズはもういない。昨日亡くなった」。もう一度、その名前に胸がおどったが今回は恐ろしいほどの喜びだった。他の人たちは彼がしばらく具合悪そうに見えたことや「彼が二度と戻ってこないなんて、誰が考えただろう?」と言いながら、B夫人と子供たちの養育について話し合ったり、大聖堂のオルガニストは誰になるのだろうと考えたりして、とても静かに話し続けていたが、私の魂はひそかに歓喜し踊っ

ていた。最悪の恐怖は永遠に終わった！今後すべての曜日がドアをノックする音に関する限りは同じに聞こえる。もちろんこの歓喜に対する私の後悔は大きかった。こうして私は自分が完全に克服できない墮落した恐怖によって、どれほど道徳的に傷つけられているかを知った。

恐怖の次に、怠惰は私の最悪の敵だった。私は朝遅くに髪をとかすのが面倒で、冬にリング部屋に行かなければならないのがとても苦痛だった。そして、授業に関しても私は怠惰だった。私はどんなことでも簡単に暗記できたので、うまくやっていたのだが、恥ずかしいほど辞書を使うのが面倒で叱責されることを覚悟して、『ラ・ロゼ』(Rosee the Rose)の翻訳、『埋葬』(Tomber to bury)などを翻訳し続けた。これは、教師側にどんな間違いがあったとしても、私の側にはたたくさんの触発があったことを示している。(p.57) 私は永遠の「テレマコス」<sup>9)</sup>にうんざりしていたので、ほとんど興味のない本を辞書で読むことができなかった。ただこの困難はすぐに終わりを告げた。というのも、1813年、レイチェルと私は2年間、デイスクールに通い、そこでの時間を有意義に過ごしたからだった。そこでは、必要な労苦を気にせず知識の習得を楽しんだ。

その壮大な新しい時代に入る前に、注目すべき点をいくつかお話ししておきたいと思う。一確かにそれ以前から私は死という概念をよく知っていた。私が4歳のときのネルソンの死は、おそらく私の心の中で死と悲しい感情を結びつけた最初の出来事だった。私が8歳か9歳のとき、いつも会う習慣になっていた叔母が亡くなった。彼女は服装も古風で、態度も独特だった。彼女の細い腕は、肘のフリルと彼女が着ている長いミットの間に見えた。彼女はいつもエプロンを着ており、モスリンのハンカチを胸に交差させていた。彼女は発作に見舞われ、私たち子供たちを当惑させ、畏れの念を抱かせたが私たちが彼女が非常に高く評価され(当然のこととして)、私たちにとって彼女は非常に印象的な人物であると聞いていた。ある朝、私が下りてくると、使用人たちが珍しく早く朝食をとっているのに気づいた。彼らはとても暗い顔をしていた。音を立てないようにしてというので、ただそれが一体何なのかの説明はなかった。雨戸は半分閉まっていた。そして母が降りてきたとき、彼女は泣き叫んでいて変わり果てた様子だったので、それが母なのかどうかほとんどわからなかった。彼女は私たちを呼んでマーティノウ叔母さんが心臓の病気で突然亡くなったと告げた。(p.59) 私たちに向けられたものではないささやきが、どういうわけかその週ずっと私たちの耳に届いてきた。私たちは、父と母が真夜中におびえた使用人たちに呼び出された様子や、家に着く前に哀れな叔父の嘆きの声を聞いた様子を見た。そして礼拝堂での彼女の賛美の説教と、特にこの機会に作曲されたヨブの言葉を含む讚美歌に感動するのに十分な年齢でもあった。「あなたの耳が彼女の声を聞いたとき、彼女を祝福したのです」叔父の暗い顔とぼさぼさの髪は私たちにとってつらいものだった。そしてこの1年間、彼は田舎の患者を訪ねるときは、時々私たち子供たちを馬車に乗せてくれたが、こうした行動は独り身になった年とともに終わりを告げた。しかし、彼は後妻からの他の贈り物や喜びよりもはるかに優れたものを私たちに与えてくれた。その一人っ子は私たち

---

<sup>9)</sup> ホメロス『オデッセイ』に出てくる英雄オデュッセウスとベネロペの子。アテナ女神の導きで放浪の旅の後父と会う。1699年フランス、フェヌロン(François de Salignac de La Mothe Fénelon)によって書かれた長編小説『テレマックの冒険』は古典主義文学として有名。

の心と人生の大きなスペースを埋める運命にあったのだ。

—その葬儀の直後、私はどういうわけか地球が宇宙を泳ぎ、その周りには空があることを知った。私はこれをジェームズに言って私たちは壮大な計画を立て、それを実行することを一瞬たりとも疑うことはなかった。私たちは庭の北側の壁の下に、それぞれ小さな庭を持っていた。土の深さは2フィートに満たなかった。そしてその下には、壊れたレンガ、火打ち石、陶器などのゴミの塊があった。私たちはこのことは知らなかった。そして私たちの計画は、地球の反対側に出るまで地球を徹底的に掘ることだった。こうなることは十分予想していたし、その底の暗闇はゆっくりと穴を横切る星々の通過によって照らされるだろう、かなり深い穴になるだろうと想像していたのだが、(p.59) 私たちの小さな鋤では地球はおろか、レンガパットさえも掘ることができないことがわかったとき、私たちは計画を変更した。私たちは、死ぬことがどのようなものかを知りたいという強い欲求を抱き、穴を自分たちの長さまで延長した。私たちはこの墓に交互に横たわり、目を閉じ、自分が死んだという想像をし、再び出てきたときお互いの気持ちを語り合った。私が覚えている限り、私たちはもうそれについてすべてを知っていると完全に信じていた。

私の子供時代の顕著な出来事は、1812年に赤ちゃんの健康のためにクローマー<sup>10)</sup>に行ったときに起こった。前述のように私は3歳にもならないときに、ヤーマスの古い栈橋の下で波が揺れる海を見た。そして、7歳のときにタインマスでもう一度海を見た。しかし今ではそれはまったく新しい光景のようだった。今までクローマーの上の隆起した地面から、きらめく広がりが見えたときほど強い印象を受けたことがあっただろうか。タインマスでは私が別の場所で語ったあの特異な出来事が起こった——私は足元のすぐ下、私が立っていたまさに斜面のふもとに海をみせられたがそれを見るができなかった。同行のメンバーは、私は頭がおかしいと思ったか、嘘をついていると思ったに違いなかった。しかし私が熱心に期待していたものを見るができないう苦痛は、十分に現実的だった。そしてやっと潮の変動に気づいたときの驚きもそうだった。だがクローマーに行ったとき、このことはすべて私の心から消えていた。そしてその光景は全く新しいものに思えた。それはナースメイドと私たち子供たちがそこで過ごした素晴らしい一ヶ月だった。私たちが砂浜や崖の上になかったときには (p.60) 私はいつも庭の土手の上に座っていて、そこからはあのまっすぐな青い線、あるいは私にとってとても魅力的なあの輝きを見るができた。一ヶ月間はずっと幸せだったが私はまた、多くの新しい思想と多くの発展を得た——最終的には主に宗教的な方向だった。

その前年には、私にとって最も残念な出来事であるが、探しているものをみることができないという奇妙な現象が起こった (間違いなく、間違っていて見ているからである)。ただタインマスの海を眺めることがその強烈な事例でもあった<sup>11)</sup>。1811年の大彗星が人々の注目を集めていたとき、私の星空観察は同様にまったく効果がなかった。夜な夜な、私たち家族全員は父の倉庫の一番上にある長い窓に行った。そして、彗星についてもろ手を挙げて感嘆の声を上げるのを聞かされ私はそれ

---

<sup>10)</sup> ノリッチの北にある海外沿いの町

<sup>11)</sup> \*原著注 *Letters on the Laws of Man's Nature and Development*. P.161 参照

に完全に憤慨させられた。—なぜなら、私には彗星が見えなかったからだ。「なんで、そこにあるよ！」「それは円盤ほどの大きさだ」「チーズ皿と同じくらい大きいよ。」「ばかげたこと。月を見ないほうがいいよ。」と、彗星が見えなかったとしぶしぶ認めた私に対して、こんな残念なことばがかけられた。そして私は彗星を見ることがなかった。それが事実だった。哲学者たちはそれをどう解釈するのだろうか——当時私が9歳で、驚くほど優れた視力を持っていたことを思い出しながらそう思う。

(セクション 2 (Section II) に続く)

